三河湾沿岸

蒲郡市
1. 西浦
2. 形原
3. 塩津
4. 蒲郡・三谷・大塚

豊川市
5. 大草・浮野
6. 御馬
7. 下佐脇
8. 御油・赤坂
9. 小坂井（伊奈）

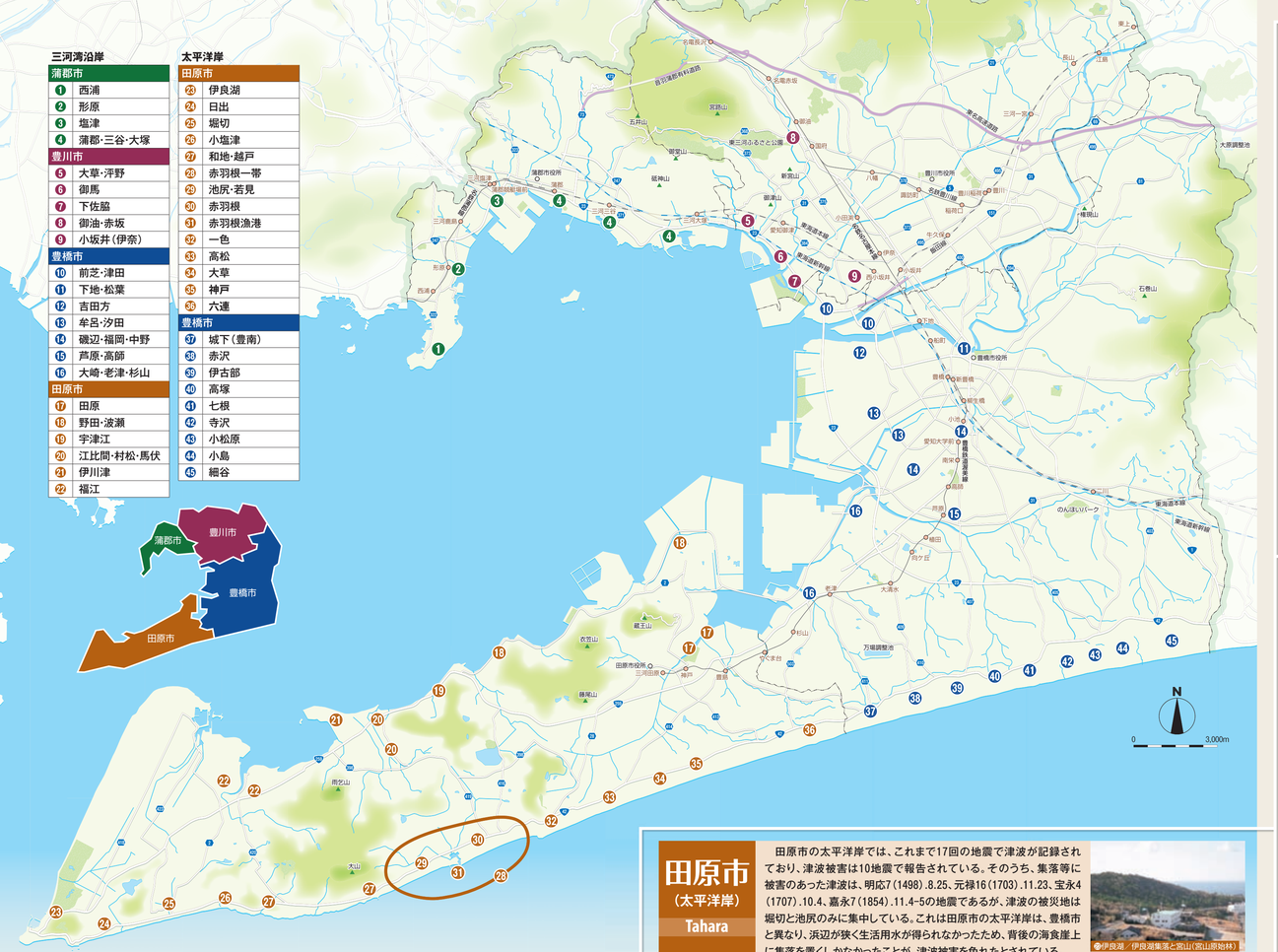
豊橋市
10. 前芝・津田
11. 下地・松葉
12. 吉田方
13. 牟呂・汐田
14. 磯辺・福岡・中野
15. 芦原・高師
16. 大崎・老津・杉山

田原市
17. 田原
18. 野田・波瀬
19. 宇津江
20. 江比間・村松・馬伏
21. 伊川津
22. 福江

太平洋岸

田原市
23. 伊良湖
24. 日出
25. 堀切
26. 小塩津
27. 和地・越戸
28. 赤羽根一帯
29. 池尻・若見
30. 赤羽根
31. 赤羽根漁港
32. 一色

豊橋市
33. 高松
34. 大草
35. 神戸
36. 六連
37. 城下（豊南）
38. 赤沢
39. 伊古部
40. 高塚
41. 七根
42. 寺沢
43. 小松原
44. 小島
45. 細谷



蒲郡市 Gamagori

蒲郡市では、これまで地震による津波が9回記録されている。地区別にみると、西浦、形原、塩津など蒲郡市西側の地区で津波被害が多く、塩津や西浦では建物の流失が記録されている。

❶西浦

西浦では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で高さ2mの津波が松島を波が打ち越して、5人の家に海水が入り、住民は屋外にて小屋を建てて寝たとの記録がある。なお、この地震で松島の大部分の松の木と地蔵菩薩が流失したが、その後地蔵菩薩が拾われて大光院に移されたとの言い伝えが残っている。

❷形原

形原では、これまで6回の地震で津波が記録されているが、津波被害はない。しかし、「わすれじの記」によると、昭和20(1945).1.13の地震で、『下市に津波がきた。』、『林光寺付近の家の前は海だった。』との住民証言の記録があるように、下市地区に津波が来て家屋が浸水したものとうかがわれる。これは、地震の断層が形原を縦断し、断層を境に旧形原漁港で1.5m隆起し、下市側で0.7m沈下したことが影響していると思われる。

❸塩津

塩津では、明応7(1498).8.25の地震で4mの津波が襲い竹谷町の白山神社が流され現在地に移転している。宝永4(1707).10.4の地震による津波では鹿島の塩田の約3割が潰れ、竹谷の塩田も潮が入り潰れている。嘉永7(1854).11.4-5の地震による津波では、竹谷の太田新田の堤防が決壊し、大飼港の堤防が流され、拾石陣屋(逸見陣屋)跡地も津波被害を受けている。昭和20(1945).1.13の地震では、津波が60cm発生し塩田に海水が浸水している。

❹蒲郡・三谷・大塚

蒲郡・三谷・大塚では、宝永4(1707).10.4、昭和20(1945).1.13、平成22(2010).2.27(津波は28日)の地震で津波が記録されているが、被害は記録されていない。昭和20(1945).1.13の地震では1mほどの津波が蒲郡に来襲し、岸壁の上まで水がきたとの報告がある。

❶西浦／松島

❷形原／林光寺付近

❸塩津／大飼港(右)と太田新田(蒲郡競艇場)付近(左)

❹蒲郡～大塚／竹島海岸

豊川市 Toyokawa

豊川市では、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5、平成22(2010).2.27(津波は28日)の地震で津波が記録されており、宝永4(1707).10.4の地震では大草、浮野、下佐脇の塩田で津波被害が、嘉永7(1854).11.4-5の地震では御馬、御油、赤坂の集落等で津波被害が報告されている。

❺大草・浮野

大草・浮野では、宝永4(1707).10.4の地震で津波が記録されており、両地区とも塩田に大損害を受けたほか、大草では堤防が8.5kmも破損し、損害も大きかったとの記録がある。

❻御馬

御馬では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で「激波ノ為二五百俵計海面ヘ引出サル」と津波被害が記録されていることから、当時年貢米が集積されていた御馬港で津波被害があったと思われる。

❼下佐脇

下佐脇では、宝永4(1707).10.4の地震で津波が発生しており、塩田は全滅し、水田、畑も被害があったと記録されている。

❽御油・赤坂

御油・赤坂では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波が4～5m発生し、死傷者や家屋流失などの多大な被害があったと記録されている。ただし、御油・赤坂での津波は音羽川を遡上したものと思われるが、距離や標高からこの規模の津波は困難と記されており、別の文献では御油・赤坂ともに地震そのものの被害は軽かったとの記録もある。

❾小坂井（伊奈）

小坂井(伊奈)にある東漸寺は、往古前芝村にあり本尊の延命地蔵尊が祀られていたが、津波で地蔵尊が伊奈の地に漂着したため、現在地に堂宇を建てて、地蔵尊を本尊として祀っている。(津波の被害時期は明応元年(1492)以前と天文9年(1540)の2説がある。)平井八幡社は、天文年間の初期(1532頃)の大洪水によって社殿が流失し、豊橋市賀茂の照山の麓に流れ着いたとの言い伝えがある。

❺大草・浮野／大草海岸

❻御馬／御馬漁港(御馬湊)

❼下佐脇／下佐脇新田付近(右:素盞嗚神社)

❽御油・赤坂／音羽川河口付近

豊橋市（三河湾沿岸） Toyohashi

豊橋市の三河湾沿岸では、これまで12回の地震で津波が記録されており、そのうち6地震で津波被害が報告されている。地区別にみると、江戸時代より新田開発が行われた前芝、吉田方、牟呂、汐田などの地区で、田畑への津波被害がでている。また、江戸時代に海辺に近かった磯辺(草間)、高師、芦原、老津などの地区でも、集落への津波被害がみられる。

❿前芝・津田

前芝では、宝永4(1707).10.4、昭和21(1946).12.21、昭和35(1960).5.23(津波は24日)の地震で津波が記録されており、特に宝永4(1707).10.4の津波では梅雨材の塩田が全滅している(その跡地に山内新田が作られた)。また、津田にある医王寺の薬師如来は、大地震の津波で下五井村へと流れ着き、下五井の人々が祀ったとの言い伝えがある。

⓫下地・松葉

下地・松葉では、嘉永7(1854).11.4-5、昭和20(1945).1.13の地震で津波が記録されている。特に嘉永7(1854).11.4-5の地震では津波が豊川を遡上し、水位が3合位(約1.8m)に増水し旧吉田大橋(現豊橋)が損傷(往来の支障を来す程の損傷ではない)している。

⓬吉田方

吉田方では、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波が記録されている。宝永4(1707).10.4の地震では高須・土倉新田が津波被害を受けている。嘉永7(1854).11.4-5の地震では高須新田で波高3mの津波が発生し、堤防が破壊され大損害となり、青竹新田でも潮が入る被害を受けた。

⓭牟呂・汐田

牟呂では、明応7(1498).8.25に3～4mの津波があり、牟呂吉田にあった素盞嗚神社が流失し、豊橋駅の西南2kmに移転している。嘉永7(1854).11.4-5の地震では富士見新田が破損している(津波の影響かは不明)。汐田では、宝永4(1707).10.4の津波やその前後に発生した高潮等により、松島新田が高須・土倉新田(吉田方)と同様の津波(高潮)被害を受けている。

⓮磯辺・福岡・中野

江戸時代の磯辺は、駒形町・本宮神社より低い所ではほとんど海であったとされており、明応7(1498).6.25の地震では大津波が発生し、海辺の家屋を破壊している。宝永4(1707).10.4の地震では津波が海岸の堤防を破壊し、神野新田町の昌井跡、駒形町の広場などに浸水している。嘉永7(1854).11.4-5の地震では、津波で草間村の海岸が決壊している。なお磯辺より内陸の福岡や中野では、津波にまつわる地名(小浜)、寺院名(潮音寺)や寺周辺の地名(塩満)の言い伝えがある。

❿前芝・津田／山内新田付近と佐奈川

⓫下地・松葉／旧吉田大橋(現豊橋)

⓬吉田方／高須新田付近と善川

⓭牟呂・汐田／松島新田付近と柳生川

⓮磯辺・福岡・中野／駒形町・本宮神宮付近

豊橋市（三河湾沿岸） Tahara

田原市の三河湾沿岸では、嘉保3(1096).11.24から平成23(2011).3.11までの11地震で津波が記録されている。嘉保3(1096).11.24、明応7(1498).8.25、慶長9(1605).12.16、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の5回の地震では3～5mの津波が発生し、死者、家屋流失または破壊、堤防破壊、田畑浸水等の被害を受けた。

⓯芦原・高師

江戸時代の芦原・高師は、梅田川沿いに高足漆(現・西高師町船渡)があったとされており、明応7(1498).8.25の地震では高さ3mの高波が高師浜を襲っている。嘉永7(1854).11.4-5の地震では大津波が襲来し、家屋敷が多数流失し、道目記地区(大山町)の集落は松井に移転し、浜海道船原(浜道町)の集落の一部も高地へ屋敷替えしている。

⓰大崎・老津・杉山

老津では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3～4mの津波が襲い、地震による倒壊家屋が40戸あったと記録されている(津波の影響かは不明)。大崎では、昭和20(1945).1.13の地震で津波(最大全振幅52cm)が観測されているが、被害は記録されていない。杉山は津波による被害の記録はない。

⓯芦原・高師／西高師町船渡付近と梅田川

⓰大崎・老津・杉山／紙田川河口付近(右:杉山の集落、左:老津の集落)

豊橋市（太平洋岸） Toyohashi

豊橋市の太平洋岸では、これまで11地震で津波が記録されており、そのうち津波被害は、嘉保3(1096).11.24から嘉永7(1854).11.4-5まで6回ある。特に宝永4(1707).10.4の津波では、当時海食崖前の浜辺や開折谷の中に立地していた集落が被害を受け、この津波を契機に浜辺の集落は完全に放棄され海食崖上の台地に移転している。嘉永7(1854).11.4-5では、二川(寺沢・小松原・小島・細谷)の海岸に津波が来て、死人が多く、家屋が過半流れたとの記録があるが、詳細はわからない。

⓱城下（豊南）

城下(豊南)では、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震で6～7mの津波が発生し、漁具が流失する被害を受けているが、集落は宝永4年(1707)以前に海食崖下の上の台地に移転していたため、海落への津波被害の記録はない。ただし、八柱神社の文献では、浜に残っていた一部の集落がこの地震により移転したと伝えられており、同神社に祀られている八王子大明神はその集落移転の時に改名したとの言い伝えがある。

⓲赤沢

赤沢では、宝永4(1707).10.4の地震で太平洋に注ぐ開折谷の小河川に6～7mの津波が浸入し、川筋の標高数m付近にあった村落が被害を受けている。また吉祥院は、宝永4(1707).10.4の地震で寺山が崩れ、現在地に移転し、それにともない集落も移転している。

⓳伊古部

伊古部では、宝永4(1707).10.4の地震で船・漁具が流失し、当時大塚・本郷・批杷ケ谷の海食崖の下にあった集落も被災し、段丘崖上に移転している。なお法蔵寺の馬頭観音は、村の移転によって置き去りにされていたものを祀ったとの言い伝えがある。また嘉永7(1854).11.4-5の津波では、船3隻が流失し、居宅も大破するなど集落に甚大な被害を与えている。

⓴高塚

高塚では、元禄16(1703).11.23、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震・余震による津波が記録されているが、すべて漁船や漁具類の流失被害である。高塚の集落は享3年(1686)の地震で浜屋敷から台地上へ移転したため、宝永4(1707).10.4の地震による津波被害はみられないが、この地震で高塚村の24軒(40%)が転び、菟原神社の戸口うの宮様も海へ落ちる被害がでている。

㊶七根

七根では、竜泉寺が宝永4(1707).10.4の地震で津波の被害を受け移転している。また御厨神社の文献では当時、同神社が立地していた「河内の地」の集落が宝永(1707).10.4の大津波で安全な北方高地に移転し、氏神(御厨神社)も遷宮したと伝えられている。なお御厨神社では嘉永7(1854).11.4-5の津波を描いた絵馬が残っており、「大津波来りて 村々の網角 悉く押流され目に掛る物もなし」と津波の様子を伝えている。

㊷寺沢

寺沢では、宝永4(1707).10.4の地震で、海辺に立地していた東漸寺が津波被害を受け、現在の地に移転している。なお東漸寺に祀られている石者塔は、当時、海岸の墓地に建っていたが、大津波の被害を受けてもこの塔だけは残り、現在に至っている。

㊸小松原

小松原では、宝永4(1707).10.4の地震で、海岸近くに立っていた東観音寺が津波で大きな被害を受け、正徳3年(1713)に現在地へ移転している。同様に、海辺の柄沢平に奉祀してあった小松原蓮華社も、大津波で現在地に移転している。東観音寺には小松原海岸の雑木林の中に跡地を示す「開山行基菩薩」と刻まれた石碑や、江戸時代前期の「東観音寺古海岸図」、「小松原村絵図」が残されており、当時太平洋の海岸沿いに集落があったことを現在まで伝えている。

㊹小島

小島では、宝永4(1707).10.4の地震で、大応寺が津波被害を受けており、海岸に立地していた小島神社も地震被害(津波は不明)を受けている。両寺社ともこの地震・津波を契機に移転している。

㊺細谷

細谷では、宝永4(1707).10.4の地震で高さ6mの大津波が襲い、船や漁具が残らず流失し、多くの住民、馬が死亡している。当時の集落は海岸崖下にあったが、この津波で大半が流出し、細谷に立地していた真月寺、幸福寺が移転している。その後の嘉永7(1854).11.4-5の地震では、津波で網・船が流失しているが、集落への被害記録はない。

⓱城下(豊南)／八王子大明神が祀られている八柱神社

⓲赤沢／赤沢海岸の開折谷と小河川

⓳伊古部／伊古部海岸の海食崖と地引網漁船

⓴高塚／高塚海岸の海食崖

㊶七根／西七根町の御厨神社

㊷小松原／小松原村絵図の海岸付近(江戸時代前期)

㊸小松原／小松原海岸の開折谷と老人福祉施設

㊹小島／大応寺

㊺細谷／細谷海岸の開折谷と小河川

田原市（三河湾沿岸） Tahara

田原市の三河湾沿岸では、嘉保3(1096).11.24から平成23(2011).3.11までの11地震で津波が記録されている。嘉保3(1096).11.24、明応7(1498).8.25、慶長9(1605).12.16、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の5回の地震では3～5mの津波が発生し、死者、家屋流失または破壊、堤防破壊、田畑浸水等の被害を受けた。

㊶田原

田原では、明応7(1498).8.25から平成22(2010).2.27(津波は28日)までの6地震で津波が記録されている。特に、宝永4(1707).10.4の地震は高さ4～5mの津波が汐川を襲い、汐川の堤や海新田(場所は不明)の堤防が決壊し田畑に被害があったほか、田原御城下など内陸にまで潮が入り込む被害を受けた。嘉永7(1854).11.4-5の地震では高さ3～4mの津波が汐川を遡上し船倉橋まで高潮が上がり、海新田は津波で堤が切れ聚年まで海となっていた。海辺では船・漁具が多数流失し、100間(約180m)の浜辺が欠けたとの記録がある。そのほか昭和19(1944).12.17の地震では0.5mの津波が発生し、吉胡地内の低湿田地の一部が海水面下に沈下した。

㊷野田・波瀬

野田では、宝永4(1707).10.4の地震で海辺に津波が上がり、網、船、漁具は流失し、浜筋の者は残らず山に逃げている。この地震で野田は、田原藩領内の中で最も被害を受けている。波瀬では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3～4mの津波があったとされるが、津波被害は報告されていない。

㊸宇津江

宇津江では、江戸時代、地引網で稼ぎ暮らしを立てていたが、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3～4mの津波があり、地引網引場が冠水し、田畑に津波が浸水する被害を受けている。

㊹江比間・村松・馬伏

江比間では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で3～4mの津波が発生し、江比間港(現泉港)での被害が大きかったほか、江比間の海に近い一本松に鎮座していた津島神社、厳島神社、弁天社、牛頭天王社が津波の被害を受け、前ノ山(前山)に移転している。この地震では、江比間から新堀川等で繋がる内陸の馬伏・村松、江比間の川向・山崎集落において、川の堤が破損する被害がでており、津波が川を遡上したことを示す文献もみられる。

㊺伊川津

伊川津では、天保5年(1834)に伊井新田が開発されたが、嘉永7(1854).11.4-5の地震による津波で、伊井新田の囲い堤が残らず欠け、亡所同様となった。その後修復が安政2(1855).7までかかっている。

㊻福江

福江では、宝永4(1707).10.4から昭和35(1960).5.23(津波は24日)までの5地震で津波が記録され、宝永4(1707).10.4では5m近くの津波が発生している。嘉永7(1854).11.4-5の地震では福江の各地で津波被害がでており、陣屋が立地していた畠では、津波で請家居宅1軒、長屋漬2ヶ所の被害を受け、川岸通りの家が浸水し、水道橋や江川の観音橋が破損したほか、内陸の保美まで潮水が浸水している。また延宝元年(1673)に開発された向山新田でも嘉永7(1854).11.4-5の津波で常堀、水門の堤防が破壊され、約56町(約56ha)の新田が一面亡所となった。さらに、福江の中でも強労が盛んであった古田では船2隻、浜道具が流失している。

㊼和地・越戸

和地では、嘉永7(1854).11.4-5の津波で船11隻が流失・大損し、漁具も流失する被害を受けただけでなく、家居その他海辺の田畑までも津波で押し流された。特に川尻では3軒が流失した記録があり、川尻川の河口部の集落では、この津波の影響で現在の国道42号沿いに移転したとの言い伝えがある。越戸でも、嘉永7(1854).11.4-5の津波で船3隻が流失し、漁具が流失する被害を受けている。

㊽赤羽根一帯（若見・池尻・赤羽根）

赤羽根一帯では、元禄16(1703).11.23から平成23(2011).3.11までの11地震で津波が記録されており、元禄16(1703).11.23、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5、平成23(2011).3.11の地震で津波被害を受けている。特に、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の津波では、池尻川河口の低地にある池尻の一部の民家が流失している。

㊾池尻・若見

池尻川の西にある池尻では、海食崖背後の標高5～20mほどの北斜面上に集落が立地し、精進川下流部の標高5m以下の辺りまで民家が建っていた。そのため、宝永4(1707).10.4の地震では6～7mの津波が池尻川・精進川を遡上し、赤羽根池尻の川筋の村が大破している。嘉永7(1854).11.4-5の地震でも波高6～10mの津波が池尻川・精進川を遡上し、池尻の下9集落で床上浸水し、住民は所々死亡し、船13隻が大損するなど、漁船・漁具も流出したほか、池尻川河口に近い所に鎮座していた弁天社が津波により流失している。

㊶田原／吉胡新田付近と汐川

㊷田原／船倉橋付近と汐川

㊷野田・波瀬／野田海岸沿いの集落

㊸宇津江／宇津江漁港

㊹江比間・村松・馬伏／泉港付近の海岸

㊺伊川津／伊川津新田付近と堤防

㊻福江／免々田川河口付近(右:向山新田、左:福江の集落)

㉓伊良湖／伊良湖集落と宮山(宮山原始林)

㉔日出／大堀川河口

㉕堀切／西堀切村絵図にある津波の浸水域を描いた墨引き(赤線)と記録

㉕堀切／後山からみた東堀切の集落

㉖小塩津／正福寺

㊼和地・越戸／川尻川河口付近

㊽赤羽根一帯(若見・池尻・赤羽根)／池尻川河口付近

㊾池尻・若見／精進川河口付近

田原市（太平洋岸） Tahara

田原市の太平洋岸では、これまで17回の地震で津波が記録されており、津波被害は10地震で報告されている。そのうち、集落等に被害のあった津波は、明応7(1498).8.25、元禄16(1703).11.23、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の地震であるが、津波の被災地は堀切と池尻のみに集中している。これは田原市の太平洋岸は、豊橋市と異なり、浜辺が狭く生活用水が得られなかったため、背後の海食崖上に集落を置くしかなかったことが、津波被害を免れたとされている。

㉓伊良湖

伊良湖では、昭和19(1944).12.7と昭和35(1960).5.23(津波は24日)の地震で津波が記録されているが、津波被害はない。江戸時代の伊良湖の集落は、太平洋岸からは宮山(宮山原始林)を挟んだ山の北麓にあったため津波被害を免れたと考えられる。

㉔日出

日出では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波被害が記録されており、住民1名が大堀川で溺死し、多くの家屋が流失しており、住民は西にある骨山に避難していた。また津波により船や漁具も流失し、住民は村の奥に移転するなどの自由な暮らしをしたとされており、津波被害を防ぐためにも日出と堀切の住民は「かいがらほた」と呼ぶ特産のいの貝やカキの殻を積み上げて、津波除け堤を築いてきた。

㉕堀切

堀切は、これまで4回の地震で5～8mの津波が記録されている。堀切は海食崖が消失し砂浜と後背湿地の間の標高4.5～5mに集落があったため、津波が起きるたびに大きな被害を受けている。明応7(1498).8.25の津波では人家倒壊、死者があり、宝永4(1707).10.4の津波では集落跡も残さないほどの被害で、常光寺が被災し北方高地に移転している。嘉永7(1854).11.4-5の津波では、西堀切で総家数233の内、流失家数113、死者8人(記録により異なる)、東堀切で総家数68の内、流失家数4の被害を受けている。この津波で汐除堤や土居敷が残らず欠崩れ、田畑も一円に石砂が入り、地引網・船が皆流失する被害があり、「西堀切村絵図」では20町37間の砂浜に黒引きを「此船印嘉永七寅年、大津波ノセツ御引アリ」と津波によって砂浜が広く欠損したことを描いている。また、津波襲来時、西堀切の住民は城山へ、東堀切の住民は御林山(後山、馬越山)に逃れ、その際津波から避難する住民の様子が今でも語られている。

㉖小塩津

小塩津は、嘉永7(1854).11.4-5に波高6～8mの津波により、浜道具が残らず流失し、船7隻が大破流失し、住民は御林山(後山、馬越山)に逃げている。小塩津はその昔鞭崎(越津)と呼ばれた伊勢へ渡る港町であったが、天長4(827).7.13の大地震で海岸は大陥没し、集落とともに正福寺も日吉神社も移転し、地名を小塩津と改めたとの言い伝えがある。

㉗和地・越戸

和地では、嘉永7(1854).11.4-5の津波で船11隻が流失・大損し、漁具も流失する被害を受けただけでなく、家居その他海辺の田畑までも津波で押し流された。特に川尻では3軒が流失した記録があり、川尻川の河口部の集落では、この津波の影響で現在の国道42号沿いに移転したとの言い伝えがある。越戸でも、嘉永7(1854).11.4-5の津波で船3隻が流失し、漁具が流失する被害を受けている。

㉘赤羽根一帯（若見・池尻・赤羽根）

赤羽根一帯では、元禄16(1703).11.23から平成23(2011).3.11までの11地震で津波が記録されており、元禄16(1703).11.23、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5、平成23(2011).3.11の地震で津波被害を受けている。特に、宝永4(1707).10.4、嘉永7(1854).11.4-5の津波では、池尻川河口の低地にある池尻の一部の民家が流失している。

㉙池尻・若見

池尻川の西にある池尻では、海食崖背後の標高5～20mほどの北斜面上に集落が立地し、精進川下流部の標高5m以下の辺りまで民家が建っていた。そのため、宝永4(1707).10.4の地震では6～7mの津波が池尻川・精進川を遡上し、池尻の下9集落で床上浸水し、住民は所々死亡し、船13隻が大損するなど、漁船・漁具も流出したほか、池尻川河口に近い所に鎮座していた弁天社が津波により流失している。

㉚赤羽根

池尻川の東にある赤羽根では、宝永4(1707).10.4の地震による大津波で浜道具が流れ、嘉永7(1854).11.4-5の地震では6～10mの津波で漁船11隻、漁具が流失した記録がある。集落は標高25mほどの平坦な台地上に立地していたため、津波による集落への被害はあまりないが、嘉永7(1854).11.4-5の地震で現在の若宮八幡社付近が津波被害を受けたほか、池尻川から潮が入り村方の茂川渡り場まで潮があがるなど、内陸側まで被害が及んでいる。

㉛赤羽根漁港

池尻川河口部の赤羽根漁港は、平成22(2010).2.28に70cmの津波、平成23(2011).3.11に1.6mの津波が記録されており、特に平成23(2011).3.11の津波では、引き潮で水位が2m半も下がり漁港一帯の海底が露呈するほどであった。この津波で2隻の船が転覆し廃船となっている。

㉜一色

一色では、嘉永7(1854).11.4-5の津波で、大磯が砂浜にある岩に見えてしまう程沖合にまで海が引いたとの言い伝えがある。

㉝高松

高松では、宝永4(1707).10.4の地震で、常より5丈(約15m)程高く津波があがり、ほうべの低い所を越え、網、船が残らず流れた。また、八柱神社は旧来「宮沢」にあったが、宝永4(1707).10.4の地震により2年後に比呂古山(現広子村)へ移転している(津波の被害かは不明)。

㉞大草

大草では、嘉永7(1854).11.4-5の津波で、船1隻が流失したほか、漁具が流失している。安政2(1855).9.28の地震では、高潮により浜道具が多く流れた。

㉟神戸

神戸では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で、海面が20丁(約2.2km)位引き潮になり、崖等が欠け6・7合(約4m)まで海となるなどの大津波が襲い、住民は食物を持って逃れた。安政2(1855).9.28の地震では、谷ノ口浦で崖下8尺(約2.4m)くらいの津波が打ち付け、船・網が流れた。

㊱六連

六連では、嘉永7(1854).11.4-5の地震で津波が記録されており、久美原村では網などの漁具が流失する被害を受けている。

㉚赤羽根漁港

㉜一色／一色海岸と大磯

㉝高松／高松海岸の海食崖と開折谷

㉟神戸／谷ノ口海岸の開折谷

㊱六連／久美原海岸の海食崖